

10代の母親が社会化する過程において、 顕在化する支援ニーズ

大川 聡子*

アメリカ、イギリスは10代で出産した母親に対し、社会的背景を踏まえた公的支援が行なわれているが、わが国において10代の妊娠は「予防」することに重きがおかれ、不可視化されている現状にあり、公的支援は乏しい。本研究においては、10代の母親が、母親となることで青年期の課題である「アイデンティティの形成」を行なっていることに着目し、10代の母親が、母親としての自己認識を深め、自らの行動を変容させていく過程とその背景にあるものを、ピアグループにおけるインタビュー調査を基に分析する。インタビュー結果から、10代の母親たちは自らに母親役割を課すことで、これまでの生活を大きく変更することができ、母性という統制を、能動的に自身の社会化のために利用していると考えられた。10代の母親たちは、青年期でありながら子どもを産み育てるという生殖期の課題に直面するが、母親としての自己認識を深めることで、青年期の課題も達成することができている。また母親達は、ピアグループに参加することで、悩みを相談し合う仲間を作り、10代の母親としての振る舞いを学ぶなど、多くのことを得ていた。10代の母親が社会化していく過程を支援するために、現状の子育て支援だけでなく、就業支援、福祉施策の情報提供、ピアグループによる支援等が必要であると考えられた。

キーワード：10代妊娠・出産、ピア、アイデンティティ形成、インタビュー調査

目次	での他者との関わり
I. 問題と目的	2. ピアグループの役割
II. 方法	3. 10代の母親の社会的背景と固有のニーズ
1. 研究協力者とサポートグループ「B」の概要	4. 10代の出産をもたらす社会的諸条件
2. 分析方法	おわりに
3. 倫理的配慮	
III. 結果	
1. 10代の出産に至る背景要因	I. 問題と目的
2. 母親としての心理社会的課題の表面化	
3. 母親としての自己認識形成と社会行動の変化	
IV. 考察	
1. 10代の母親という自己認識を形成していく上	

わが国の2008年の10代女性の出生数は、15,465人（人口動態統計）であり、前年比215人増加し、全出生数の1.42%を占める。また、同年の10代の人工妊娠中絶件数は22,835件（平成

*立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

20年度保健・衛生行政業務報告）であり、前年比1,150件減少した。妊娠した10代の女性の約6割と、半数以上が人工妊娠中絶を選択し、出産を選択するのは約4割である。そのため、10代での出産を「望まない妊娠」による出産と捉える先行研究は多い。

10代の出産については、身体的な不利よりも社会的な不利の方がより大きいと述べている先行研究が多く見られる。その内容として、世帯の職業において無職が1割弱を占め、経済的な問題が多いと予測されること（安達, 2006）、母親が専門的知識や技術を持たない結果、専門的職業につくことができず、不安定就業にならざるを得なくなること（森田, 2004）、また非嫡出子の割合が多く、配偶関係が不安定であること（安達, 2006）、親としての責任・自覚の欠如、自己同一性の未確立などの人間的未熟（前川, 2001）などである。このように、10代で出産した社会的背景が問題視されるのではなく、未婚であること、学歴を中断すること、就業が不安定であること、そして10代であるがゆえに「未熟」であることなど、10代で出産したことに起因する社会的な不利が問題とされている。夫や家族の状況として、前川（同）は、夫の収入や周囲のサポートが十分でないことが多い、と述べている。森田（2004）も、子の父親が十分にパートナーとしての役割を果たす余地がなかったり、子の父親としての役割を果たすことができにくい状況にあるとしている。さらに、家庭的背景、状況よりDV（ドメスティックバイオレンス）の誘因、乳幼児虐待のリスク要因となる（貞永, 2006）とされ、10代で出産した母親のパートナーや、家族の問題が指摘されている。しかし、出産に至るまでの社会的な不利はほとんど注目されていないために、それらの不

利に対しての対策は行なわれておらず、10代で出産することの社会的な不利は、個人に帰されている状況にある。そのため、10代での出産は私的な出来事として不可視化されていく。

社会的に不利というだけでなく、10代の母親個人が問題視される理由として、10代すなわち子ども、とする認識や、妊娠を性「非行」として捉える研究者の見解が影響していると推察される。さらに、児童虐待報告件数の増加も、研究者の10代の出産に対する視線と密接に関連している。10代での出産は、児童虐待のリスクであると定義されており、「(虐待の)未然防止に政策の力点が置かれるようになった」（上野, 2007）ことから、10代での出産は、児童虐待の未然防止のために「予防」すべきものとされている。

他方、アメリカ、イギリスにおいては、10代で出産する母親の社会的背景について、詳細に調査が行われている。アメリカでは、男性で無職の者が多く、収入が低く、貧困であり、福祉を受けている人が多い地域ほど、18歳以下で結婚する者の割合が高い（CDC, 2002）事が明らかになっている。イギリスでは、貧困地域（Deprived Area）¹⁾ 上位10%の71%が18歳以下で妊娠するが、富裕地域上位10%においては18%と4倍近い開きがある（Offices for Deputy Prime minister, 2004）。また、貧困地域上位20%において、教育到達度と18歳以下の妊娠について比較すると、教育到達度が低い人ほど妊娠率が高い（DfES, 2006）。10代の母親、23歳未満の父親となる確率とリスク要因（母親が10代で出産、父親の社会階層が低い、素行の悪さ、住宅供給を受けている、読み書きが困難）との関連では、これらの全ての要因が重なるほど10代で出産する確率が高い（Centre for

Longitudinal Studies, 2005) など、10代の出産と社会的な不利の関連も明らかになっている。

Cater (2006) は、10代で出産した母親、父親に対しインタビューを行なった結果、母親達はこれまで社会から無視されていた存在であったが、妊娠して子どもを持つことで社会的地位が上がったと感じていたという。このことから、10代の母親達が、出産前の社会的に不利な状況を緩和するための手段として、妊娠・出産を選択するという側面も示されている。

アメリカ、イギリスにおいては、こうした社会的背景を踏まえた公的支援が行なわれている。しかし、わが国の10代の母親に対する支援の方向性は、10代の妊娠を「予防」することに重きが置かれており、出産した10代の母親に対する独自の支援は行われていない。わが国においては、出産後も家族からのインフォーマルサポートが受けられることから、公的支援は殆どなく、10代の妊娠においては予防に対する取り組みが主であり、出産した10代の母親に対しては、「健やか親子21」²⁾に「妊娠・出産により教育を受ける機会が妨げられることのないよう取り組みの推進を行う」とあるのみである。

しかし、ごく少数の市町村や産婦人科においては、10代の母親の固有のニーズを見出し、支援を行なっている。大阪府東大阪市や大阪市西成区、堺市北区、静岡県浜松市等では10代の母親グループを立ち上げ、グループ支援を行なっている。また、渡邊 (2008) は、長野県の北信母性保護相談所において10代の妊婦に対し、1週間の「教育入院」³⁾を行なっている。「教育入院」を通して、出産した産後の生活を具体的にイメージし、出産の選択を自発的にできるようになるという。

このようにわが国では、10代の妊娠予防に対

する取り組みと比較して、出産した母親への支援は限定的である。その理由としてさらに付け加えるとすれば、家族のインフォーマルサポートである。しかし、その家族が十分機能せず、私的領域に依存することができないケースもあると推察される。こうしたケースの背景にある社会的な不利や、10代の母親が持つ固有のニーズについて注視し、「予防」するものとして不可視化されている10代の母親を可視化し、実態に応じた支援を検討していく必要がある。

10代の母親は、青年期でありながら、子どもを生み育てるという生殖期の課題に直面する。そのため、青年期の課題であるアイデンティティ形成に困難が生じることが考えられる。

田間 (2001) は、ある個人が、「女性」というアイデンティティを持ち、それが個人にとって重要なアイデンティティである場合、その個人は自己の重要なアイデンティティを維持するためという理由によって母性を主体的に内面化しやすい。その結果として、逸脱を自己の責任とし、統制を主体的に受け入れやすいと述べている。10代で出産した母親たちにおいても、統制を受け入れて母性を内面化し、自らの生活や行動を、母親としてあるべきものに変容させたのだろうか。10代で母親となることを選択する行動力を持つ彼女たちが、母親として行動する理由は、統制を受けたこと以外にも存在するのではないだろうか。

また、アイデンティティ形成において、他者から承認を受けることは重要である (エリクソン, 1982)。10代の母親は、「予防」すべきものであるとされ、児童虐待など反社会的行動のリスクと見られていることから、他者からの承認を得ることは容易なことではない。他者から承認されない人間が地域社会から受ける影響につ

いて、エリクソン(同)は「一人の青年が、ある決定的な瞬間に不愉快な人間だと「認め」られると、地域社会は、時々、かれに態度を変えるように示唆する。しかも、その態度の変更はそれをいくら行っても「彼自身と同等な」ものとなることはないような態度の変更でなければならぬと示唆するのである」という。このように、自身を見失うほどの態度変更を伴う地域社会からの拒絶は、母親として自己認識を確立していく過程にある彼女たちにとって、大きな試練となる。10代の母親は、青年期にあることで、母親としての自己認識を形成する上での困難だけでなく、地域社会からの承認を受けることへの困難の、二重の困難に直面すると考えられる。

本研究では、10代の母親グループにおける実態調査に基づいて、10代で出産した母親が母親としての自己認識形成における困難と、他者から承認を受けることへの困難に対し、どのように対処し、その行動を変容させているのかを明らかにする。その過程で、10代の母親達が、母親として行動変容する背景に存在するものについて明らかにする。また、同世代の友人(ピア)の役割についても明らかにし、10代の母親の固有のニーズについて考察したい。

II. 方法

1. 研究協力者とサポートグループ「B」の概要

研究協力者は、A市において10代で出産した母親を対象に行われているグループ参加者である。2006年5月、8月に参加者15名(述べ20名)を2グループに分け、半構成的質問紙を用いて、グループインタビューを行った。内容は、妊娠から出産までの周囲のかかわり、母親

になったことでの変化、サービスの活用、支援の有無等である。

サポートグループ「B」は、2000年10月に発足した。立ち上げたのは、A市保健センターで、10代の母親の支援に携わる保健師であった。A市は、10代の母親の出生率が全国平均1.4%と比べて1.9%と高く、立ち上げのきっかけについて松山(2004)は「10代の母親に支援する中で、育児に不慣れで児の気持ちに沿うことができない場面がよく見られた。20代30代の母親が中心となる育児グループ等では違和感と抵抗感をもっているため参加することが少なく、子育てに関する知識や技術の取得、母性を形成するチャンスが他の母親に比べて少ないことがさらに育児を困難にしている」と感じ、「彼女たちが同世代の母親には関心を持っていることに着目し、グループ支援を開設するにあたった」と述べている。

このように、当初の目的は「子育てに関する知識や技術の取得、母性を形成すること」であったが、グループが継続するにあたって、メンバー間の相互作用が多彩に見られ、母親として成長していく過程に、大きな影響を及ぼしていると考えられた。

参加者は10代で出産しており、現在20代の母親も含む。妊娠中の参加も可能である。登録人数は20名、平均参加人数は5組である。現在このグループはA市内2地区で行なわれている。佐藤(2010)によれば参加者の背景は、一人親で育った人が4割、結婚前の妊娠が8割、参加時に母子家庭である人が2割、DVがある家庭が1割あったという。「B」のスタッフは、保健師、保育士、助産師、栄養士、ボランティアなど1回に5~11名である。ボランティア、保健師、保育士は主に育児を担当し、助産師、栄養

士、保健師はプログラムを担当する。毎月のプログラムはメンバーによって決められ、調理実習やプール遊び、クリスマス会など季節の催しを重視し、内容は多岐にわたっている。メンバーからは調理実習の要望が強い。終了後にはスタッフ間でミーティングを行い、情報を共有している。筆者は2004年8月から現在まで、このグループにおいてフィールドワークを続けている。

このグループの特徴は、地域の更生保護女性会がボランティアとして、年2回行われる調理実習の際に2～3名参加していることである。ボランティアは民生委員等、地域での役職を兼ねていることが多い。こうしたボランティアが加わることにより、参加者は様々な世代の考え方、子どもとの接し方を学ぶことができていると考えられた。

10代の母親同士のネットワークは強く、グループ参加者も、中学校時代の同級生や同時期に産科に入院した人等、様々な場面で出会った10代の母親と交友していることが多い。こうした横のつながりも重要ではあるが、グループに参加することで、保健師と継続的なつながりを持つことも、メリットの一つにあげられる。グループの参加を通して、何か問題が起こった際にすぐ相談できる人を知ることができ、公的機関の援助につながりやすい。また保健師が継続的につながりを持つことで、参加者の変化も読み取ることができ、対象者に変化があった場合も、早期の対処を可能にしていた。

2. 分析方法

インタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し、コード化した。分類したものを、徐々に抽象度を上げながら、カテゴリ別

に類型化した。本研究では作成されたカテゴリのうち、1. 10代での出産に至る背景要因、2. 母親としての心理社会的課題の表面化、3. 母親としての自己認識形成と社会行動の変化、の3項目に着目し分析を進めた。

3. 倫理的配慮

研究への参加は自由意思に基づくものであり、参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを口頭にて説明した。面接の内容は、調査協力者の許可が得られた場合に録音し、個人名や地域が特定できないよう配慮した。面接調査の実施時間、実施場所については、対象者の住居近隣とし、生活への支障がないよう配慮した。本研究は、大阪府立大学看護学部研究倫理委員会において承認を得た。

Ⅲ. 結果

分析した結果を、カテゴリ別に記す。以下、大カテゴリを【 】, 中カテゴリを《 》, コードを〈 〉で表す。

1. 10代の出産に至る背景要因

10代の出産に至る背景要因については、学校生活への不適応、早期に自立を促される家族背景、困難を一人で解決しようとする10代の母親自身のパーソナリティーが抽出された。

(1) 【学校生活に順応しない】

〈友達とつるんでいるのが楽しい〉

Mさんは、中学校時代はあまり学校に行かず、友人と家で遊んでいることが多かったという。

Mさん：中学校のとき？ 遊びまくってた（笑）。

司会：何して遊ぶの？

Mさん：えー、別に何することもなく、友達とい
るだけやけど。

Nさん：つるんでんのが楽しいねんな？

Mさん：そう。中学校のときはそれが楽しいか
ら。よく、朝とか起きてんのは起きてんねんけ
ど、学校に行かんと、友達でゲームしてたりと
か。ずっと毎日そんなん。

こうした状況から、母親が学校に呼び出され
たこともあったが、親からは「学校に行け」と
は言われなかったという。教師も学校に何度も
誘ったが、Mさんが聞かなかつたため、最後
には「（教師も）もう諦めとった」と話していた。

〈クラスメイトと合わない〉

Iさんは、高校に進学する意欲が乏しく、友
人が行くから、という理由で進学を決意したも
の、周囲のクラスメイトと合わず、授業を受
けて帰る、というだけの高校生活だったと述
べていた。しかし、グループにおけるIさんは、
積極的に発言し、人とコミュニケーションをと
ることが苦手な様子はみられなかった。

Iさん：高校な、なんかあの、行っても行かん
くてもどっちでもよかったから、めちゃ簡単
に卒業したかったから、あほな学校行ってん
やん。もうめっちゃ一番低いレベルの。なん
かとりあえず友達行くから、みたいな感じ
で行ったら、周りがアホすぎておもん
なかってんやん。何て言うんやろ。頭
飛んでるやつが多かった。

(3) 【決断は一人です】

〈夫がいなくても子どもは産む〉

妊娠した10代の女性たちが出産をす
ぐに決意しても、同意するパートナーばかり
ではなかった。しかし、パートナーが同意
しなくても、彼女たちは一人で出産する
決意を固めている。

Aさん：どうせ一緒に住む気やってん
から、「まあえっか」言うて。でも、旦那
はびっくりしてたから、嫌がってたけど
な。だから、「別に、覚悟決まらん
のやったらいらん」って言ったもん。

Bさん：同じこと（私も）言った。

Aさん：「別にいいよ。どっちでも」
って。

Bさん：「迷ってんのやったら、ええ」
って。「1人で産むから」って。

Dさんは、当時交際していた男性と別
れてから妊娠が発覚した。男性に妊娠を
報告すると、墮胎するように言われた。
そのためDさんは、墮胎するために病
院を受診したが、エコー写真を見て、「
これはもう、おろしたくない」と思
い、出産を決意したという。男性は最
後まで墮胎するようすすめたが、D
さんはそれに従わなかった。このこ
とから、パートナーとの関係よりも、
自分の体の中に子どもがいるという
身体感覚を優先し、出産を選択して
いることがわかる。

司会：最初妊娠分かったときに、すぐ
産みたいってなった？

Dさん：思ったけど。彼氏と別れて
から発覚したから。言ったら、もう
「おろせ」って言われって。で、お
ろすつもりやって。病院行って、
エコー見た瞬間、もうこれはもう
おろしたくないと思って、産んだ。

司会：旦那さんも、もうそのときは
産んでくれて？

Dさん：産んでくれていうか、「おろしてくれ」の一点張りやった。

Cさん：勝手に産んでんな？（笑）

司会：でも、説得したっていうか。

Dさん：説得したっていうか、もうなんて言うか、もう生まれへんちゃう、おろされへん状態になっとったから。「勝手に産むわ」みたいな。で、もう一切。

〈困難は自分で解決する〉

Eさんは、困難に直面しても他人に相談せず、自分で答えを見つけて解決することが多いと言う。

Eさん：あんま友達にな、相談したりせえへん。聞く方で。あんまり言うたり、その本音の部分の、ちょっとした「旦那むかつくわ」とかは言うけど。もうほんまの本音のことはあるやろ。

Jさん：プラス思考っぽいよな。

司会：で、なんか解決したって思ったことある？

Eさん：知らんけど、自分の中でな、解決してまうねん。

司会：「まあいいや」、みたいな感じで解決してしまう？

Eさん：なんか、この問題があって、これをどうしたらいいかっていったら、それはこうしたらいいっていうのを分かっているから。だから、友達に言っても答えは分かっているから。

(3) 【出産を後押しする家族】

10代で出産する母親の家族は、一度は出産に反対しても、最終的に本人の意思を尊重し、積極的に支援する家族が多かった。

〈子育てに協力する両親〉

Aさんは、妊娠が判明し出産を決意した際に、交際を続けるかについて、パートナーの意思に任せている。その時、Aさんの父親が積極的に「子どもの面倒を見る」と言ったことで「楽になった」と述べており、父親の支援が出産の決断を後押ししたと推察される。

Aさん：（妊娠判明後、パートナーに交際を続けるか否かについて）「どっちでもどうぞ」って言った。A、そんなときパパが「別にいい」って言ってたから。Aの父親が「もし1人で産むんやったら、家におったらええ」って。「俺が稼いできたから、面倒見たるから、お前が育てていくんやったら育てていけよ」って言われたから。「あ、そう」って。（略）だから楽やった。

〈母親の願いをかなえるための出産〉

Lさんの母親は癌と診断され、「孫の顔が見たい」と言われ、出産を決意したという。父親も当初は反対していたが、出産後は孫を可愛がってくれているという。

Lさん：自分の親がなんか、癌とかなって。ほんで「孫の顔見たい」って言われたから。もし、その死んだときって言われたから、「ああ、しゃあない」と思って産んでしまった。（笑）

司会：もう親のために。

Lさん：そう。ほんで今も生きてるから「おい」みたいな。（笑）

Kさん：反対されへんかったん？

Lさん：おかんは、もう。だから、おかんがその病気になるって。おとんはもう多少反対はしたけど。産まれたらこっちのもんかな、みたいな。今はべったり。

また、出産する母親の家族自身も早婚である場合もある。Mさんの場合は、親が、交際中から「孫が見たい」と言っていたという。さらに、友人も妊娠後の結婚が多かったことから、妊娠後の結婚に抵抗が少なかったという。Kさんも同様に、Kさんの母親の出産年齢が若かったことを述べていた。

Mさん：妊娠する前から、両方の親が「早く孫見たい、見たい」言ってる。だから別に、子どもできて結婚する人もおっし。子どもできたら籍入れたらいいや、そんな感じだったから。子どもできて籍入れて、両方の親は「できた」って言った時も、めっちゃ喜んでたし。

司会：お母さんとかって、その時まだ若かったんじゃないですか？

Mさん：お母さんは、自分の親が40で、相手の親も42くらい。若いおばあちゃん。ずっと「孫見たい、見たい」って。

Nさん：珍しいよな。でも。反対せえへんって。

Mさん：両方の親が若いときに。10代とか20代とかに産んでるから。

複数：ああー。(略)

Kさん：うち、お姉ちゃん生まれたん（母親が）20歳とかそんなもんやもん。

(2) 【金銭面での自立】

10代の母親達の中には、高校生のころからアルバイトで長時間働き、得たお金を家計に入れたり、自分の学費に充てている人が多かった。10代で出産した母親の両親の雇用が、不安定であったことがうかがえる。

〈アルバイトで家計を助ける〉

Kさん：お父さんが仕事辞めたから、その分、自

分で払う分は全部自分で払って、っていうのがあったから。払わなあかんかったから。

司会：家計にっていうか？

Kさん：そうそう。そっちにやって。で、残りは全部遊んで。(笑)でも、車の免許取るために貯めたりはしとったけど、(子ども)ができて、まあ、何かいろいろと使った。

〈学費を自分で賄う〉

Mさんは、高校の学費を自分で賄うよう親に言われたため、アルバイトで賄おうとする。しかし、学校自体に興味を持てなかったため、学費を賄う意味を感じられず、高校を中退している。

Mさん：高校行ってたときは、親に「高校行きたかったら自分で学費出し」って言われとったから。バイトしながら学費出して。「おもんないのに何で学費払わなあかんねん」ってなって。で、辞めて。お金なんか、全然、貯金とか考えてなかった。(略)10万円以上稼いでも、余る月とかなかった。あるだけ使って。

2. 母親としての心理社会的課題の表面化

(1) 【原家族の問題】

① 《家族に頼れない子育ての重圧》

両親が離婚、双子の弟がおり主に祖母に育てられ、母親とのかかわりが少なかったというNさんは、「甘えることを知らへんから」と幼少時から母親に甘えることが少なかったと言う。母親については「親だけど親じゃない」と語り、育児をしていくうえでの不安を相談することもなかった。そうした不安は夫にも理解されず、Nさんは、育児の相談相手が誰もいない状況にあった。また、周囲から「若い（母親だ）

からできないだろう」と言われることに反発し、さらに母親としてのプレッシャーも感じ、自分1人で育児をこなそうと努力していた。その結果、自分のような思いはさせたくない、余計に子どもに手をかけてしまう状況にあった。

Nさん：なんか、若くして結婚してて、周りも誰もおれへんやんか。そんで言える人もおれへんし。やっぱり「若いからできひんやろ」って言われるのがすごいイヤやった。(略)もう自分のプライドと、なんか責任感の。なんて言うん、重いやんか。子どもが産まれたら。そういうので、もうめっちゃ必死やった。

②《原家族における母親役割を踏襲する》

Iさんは、原家族における母親像に自分を近づけようと努力し、夫に自らの父親を投影し、自分の母親と同じようにふるまうことで家庭を維持しようとしていた。

Iさん：うちの実家が、めっちゃ、ご飯ちゃんとせなお父さんがうるさかったから。旦那もそう思ってるかなって。お父さんはいっぱい種類なかったら、一口ずつしか食べへんの、いっぱい種類がなかったら食べなくて、家にいっぱい、いつもご飯並んでたから。で、お母さんもいっぱい、必死になって、夕方くらいからずっとご飯作ってるのを見てるから。

Iさんの夫自身は、食事の品数や出来合いのおかずを出さないように要望しているわけではない。しかし、Iさん自身は「後で言われるのが嫌だ」と料理の品数が少ないことを気にかけ、料理に時間をかけていた。その結果、生後

2か月の子どもを抱えたIさんは、睡眠不足となり、疲れを溜めていた。

10代で出産したことのプレッシャーと、実母に近づかなければならないというプレッシャー、さらに日々の育児がIさんを追い詰めていると考えられた。

(2)【10代で母親になることによって起きる摩擦】

①《夫との摩擦》

〈子どもと関わろうとしない夫〉

インタビューにおいて、母親たちは、10代で子どもを産んだことで、「若い母親だから」と言われないうえに、育児に奮闘している。しかし、父親はそこまで積極的に子どもに関わろうとはしない。そうした父親に対し、「父性がまだ育っていないから」、「男の人だから」、と半ばあきらめているような発言がたびたび聞かれた。Nさんは夫への思いを自分の中のため、鬱状態になっていたこともあったという。

Nさん：だから旦那も、なんて言うん、子どもと遊んだこともないし、全然子どものこと知らなかったと思う。私も、あまり言うタイプじゃないから、ガーって言わんかってんけど。ふとした時に、1歳くらいになった時に、「何してんねやろ、私」みたいな感じでちょっとなうて。もう、鬱やっせん。ずっと。なうてんけど、誰も言われへんかって、それを。

〈実母の子育てを理想とする夫〉

また、(1)②で述べたように、原家族における母親に近づこうとするのは、母親だけではない。Bさんの夫も、自らの母親を理想とし、同じような母親になってほしいと妻に要望することで、夫婦間の葛藤が起こっていた。

Bさん：（夫は）完璧求める人で。だから、自分の母親、マザコンじゃないと思うんだけど、自分の母親が理想像なわけ、やっぱり。家事をしながら3人兄弟おって、家事をしながら子育てをしてというのを見てたから。一番下のくせに。「それが理想や」って言ってきたから。「へえ」って。だから「私は私やから」って。「最終、なれたらええやろ？」って言って、文句言ったで、めっちゃ。

②《義父母との摩擦》

〈10代の出産は恥ずかしいと考える義母〉

10代の母親は、家族からも問題視される場合もある。問題視する側は義理の父母など、夫の家族である場合が多かった。Aさんの場合、髪を茶色に染め、タンクトップを着て、丈の短いスカートを穿くことも、姑からは「母親らしくない」と非難の対象になっている。しかし、そのことでAさんが自身のスタイルを変えることはなかった。

Aさんは、夫の家族から、10代での妊娠・出産は否定され、恥ずかしいものと捉えられていることを知っており、また、そう言った考えを持つことも当然であるかのように受け止めていた。

司会：（姑さんは）何でそんなこと（嫁のことをよその子、と）言うんでしょうね？

Aさん：恥ずかしいんやわ。「若いし、結婚して子どもなんか産んで、そんなんな、すぐ離婚して親に預けて遊びまわんねん」って、もともと言われてて。もう結婚するって決まって、親とも話して全部決まって、もう結婚して臨月入った時に「あのとき、おろしてくれたら良かったのに」ってもともとと言われてて。（略）結構、だ

からうるさい。向こうの親は、ごちゃごちゃ、ごちゃごちゃ。「髪の毛も茶色いし、もうそんなに茶色いし」とか、「ほっといて」みたいな。「そんな短いスカートはいて」とか。

③《年上の母親との摩擦》

〈付き合うことへの心理的負担〉

子どもが保育所や幼稚園に通うようになったとき、親として10代の母親たちが関わるのは、年上の母親であることが多く、「若い人はいない」と言う。そのため、「付き合うのがちょっとしんどい」と述べていた。しかし、年上の母親と付き合う中で、少数派である自分たちが「合わせなければならない存在」であると感じ、「しんどい」と思いながらも、臨機応変に対処しようとしている様子が見られた。

Kさん：幼稚園とか行くやんか、子どもが仲良くなっても、親の歳が全然違うやんか。それでも、仲良くやっていけるんかな、みたいな。子ども同士は仲良くなっても、親同士が仲悪かって、仲悪っていうか、そんなん歳全然違うやんか？ それってどうなのやろな、みたいな。

複数：ああー。

Lさん：それって、頑張らなあかんとかやな。

Nさん：うちらが合わせなあかんからな。絶対に。

④《周囲との摩擦》

〈虐待ハイリスクとされる10代の母親〉

10代で出産した母親は、若くして出産したことにより、周囲から「どうせ虐待しているんでしょ」、「子どもが子どもを産んでどうする」等言われており、さまざまな偏見の視線を向けら

れている。しかし、Bさんはこうした中傷に、その場で反論し対処していた。

Bさん：「どうせ虐待してるんでしょ」、これは妊娠中じゃないけど、産まれてから言われた。

司会：そういうのはだれが言う？

Bさん：（子ども）とどっかで買い物してる時に言われた。知らんおばちゃんに。どついてやろうかな思った。ほんまに。「何であんたに言われなあかんの？」とか思った。「どこをどう見てそういう風に言ってるんですか」って言うたったもん。「背中とか見ますか？」って言ったもんな。「全身見ていいですよ」って。

こうした中傷は後を絶たない。さらに、周囲の人だけでなく、時には医療従事者も問題視する側になる。

Aさんは受診の際、産婦人科医に「流産しやすいから気をつけて」と言われたという。なぜかと問いなおすと、夜遊びをしていると言ったわけでもないのに「夜遊び」と言われ、憤りを感じたと述べていた。Aさんはその医師を避けるようになり、その事を同病院の助産師や看護師に話したところ、皆でその医師の診察を避けるよう配慮してくれたという。このケースでは、他職種により対応をフォローすることができたが、援助者が対象者を問題視することで、支援を受けにくい状況を作ってしまうことが示唆された。

〈偏見視されることへの抵抗と諦め〉

Bさん：こんなん（インタビュー）でさ、なんか10代で子ども産んだ人たちに対する偏見な目とかなくなってくれたらええよな。

Aさん：なくならへんて。

Bさん：無理やけど。でも、少しさあ、和らいでくれたらええと思うわ。やっぱ偏見な目で見るとか多いやんか。なんであんな人がとかさ。「やっぱり」って言われるのが一番悔しいもんな。(略) 一部しか見てないんやと思うけど、一部でそういう風に悪いことがあるから、全てがそうって思われるからな。それが消えない限り。

Aさん：最近なんか慣れてきた。そういう目で見られることに。

Bさんは、このような10代の母親に対する偏見を「なくなればいい」と考えていたが、Aさんは、「なくなる」という認識を持っており、偏見にも「慣れてきて」いた。またそういった偏見を持つ人々を、そんな見方しかできないのかと諦めており、反論や対抗することなく、「もうすぐ死ぬ人だから」と突き放して考えていた。

⑤ 《同年代の友人との決別》

出産を経て多くの母親たちが、「独身の友人は常識（社会性）がない」ことを指摘していた。さらに、活動時間帯の変化についての語りが多くみられた。「独身の友人とは時間帯が合わない」、「夜型の子ばかりで、ついて行かれない」と言う。友人たち側も、母親となった友人を誘うことに気を使っている様子も見られるが、生活形態が異なってしまったため、友人たちとは距離を置かざるを得ない状況になっている。

また、「彼中心の生活をしている友人とは一緒にいられない」といったように、独身の友人と興味関心が異なってしまったため、一緒に行動することをためらう発言も聞かれた。

3. 母親としての自己認識形成と社会行動の変化

(1) 【出産後の生活習慣の変化】

10代で出産した母親は、出産したことにより「生活が180度変わった」と述べていたメンバーがいるように、昼型から夜型の生活になった、子どもがいない友人と遊ばなくなった等の生活の変化や、「今までやってきたことが、恥ずかしいこととかわかってきた」と言い、自転車に乗りながら煙草を吸わなくなったことや、「子ども連れてたまっとったら痛い」と言い、コンビニエンスストアの前で座って話をしなくなったこと、また、落ち着いたなど、行動面の変化があったと述べている。また、お金の大事さや常識を学んだなど、価値観の変化を挙げている人もいた。さらに、「今の生活では2人目は考えられない」と言い、将来を見据えた家族計画を行なっている母親もいた。子どもを出産し、母親として認められたいという思いが、こうした行動面の変化をもたらしたと考えられる。

① 《社会性を身につける》

〈料理ができるようになった〉

それまでは全く家事をしなかったLさんは、出産を機に料理をするようになったという。

〈お金の大事さがわかる〉

出産後は無駄遣いをしなくなったという母親が複数いた。

〈生活リズムを整える〉

出産前は丸一日寝ていたが、睡眠時間が減ったと述べている母親もいた。

(2) 【摩擦を解消するための戦略】

① 《夫との摩擦を解消するための戦略》

前項で述べたように、主に育児を通じて夫との摩擦が起きているが、こうした摩擦を解消しようと、妻側から夫に働き掛けることで、夫との関係が深まっていた。同様の語りは多く、妊娠中から出産後にかけて様々な時期において、お互いを理解しあい、夫との関係を深めていく過程がみられた。

〈夫の立場を推し量る〉

Nさん：旦那に対して、「お前何もせん、何で何にもせえへん、何でわかってくれへんの、私の気持ち」って思ってる時点で、もう自分、自分やから。でも、それって結局自分がしんどいねん。相手の事思えてないから、それは。旦那の方が仕事大変やねんでって、やっぱり思うことは必要やな。思いやり。旦那の方が仕事も大変、遊んでるけど仕事大変やねんでって。

Nさんは、初めは自分の気持ちを分かってもらえない夫に腹を立てていたが、出産後に父親の育児分担を決め、育児参加を促している。また、仕事をしている夫の立場を理解し、「遊ぶ」ことも仕方がないことと考え、夫に対する思いやりを持つことが必要であると考えていた。

〈自分のできる範囲を夫に理解してもらおう〉

Aさんは、夫と2年間話し合いを続け、自分のできる範囲はここまでだと夫に理解してもらうことで、夫との関係を構築していた。

Aさん：最初は、(夫に) めっちゃ言われたんやけど。でも、ずっと2年くらい格闘して。「そんなんな、家の事にしてもそやし、そんなん全部

私でけへん」っていうのを2年くらい言い続けて、「手伝ってくれなできひん」ってことも言い続けたら、なんか理解してくれたみたいで、あんまり何にも言われへんのやんか。家がぐっちゃぐちゃになっても、何にも言ってけえへんし。なんか、（夫が）ちょっと片づけてみたり。

②《義父母との摩擦を解消するための戦略》

〈夫に気づかれないように関係を調整する〉

Aさんと義母は不仲であるが、義母は時々Aさんに顔を見せにくるように言うという。Aさん一人で義母宅を訪問すると、夫の悪口を聞かされるため、義母宅に行く時は夫に同伴してもらい、夫から義母に意見してもらうように仕向けている。夫は、自らがこうした調整役を果たしていることには気づいていない、とAさんは考えている。

Aさん：旦那がおるときに（義母宅に）「一緒に顔出しに行こう」っていうふうに言った。旦那がおったら、絶対何も言ってけえへん。旦那が怒るから。「うるさい、おまえら。もうええ加減にしとけよ」って旦那が言ってくれるから。何も言ってけえへんねけど。（略）

司会：じゃ、ご主人が防波堤になってくれる？

Aさん：うん。でも、わかってない。あんまり。事の重大さっていうか。（略）旦那には気づかせないように、そうなってもらおうって思ってるのもあるし。気づいてしまったら、間に挟まれてるって言うんで、すごくしんどくなると思うから。気づかんうちにそうしておけば、Aも楽やし、旦那も楽だなんて思う。

また、Bさんも義母との折り合いの悪さについてこう語っている。

Bさん：（義父の）一周忌の時に、「恥ずかしいから来るな」言われた。私。（略）一周忌がお盆にあって、その時に私の兄貴とおかんは来てもいいけど、私は「腹がでかいから、恥ずかしいから来ないで」って言われた。

Bさんはこの件に関して憤慨し、結局義父の一周忌にBさんの家族はだれも参加することはなかった。こうした、10代で出産することをめぐる夫の家族との葛藤が、家族間にも溝を作っていくと考えられた。

③《年上の母親との摩擦を解消するための戦略》

〈理解してもらうために努力する〉

Lさんは、「保育所の人、付き合うのがちょっとしんどい」と述べているが、「自分たちが（年上の親たちに）合わせなければならない」ことを知っており、その解決策として「（保育所の）役員になること」を挙げている。役員として参加することで、保育所の母親集団における自らの居場所を作り、単なる「若い母親」でない、自分自身をわかってもらおうと努力していた。また、他の母親にも良く思われたい、という思いを持っていた。

Lさん：なんか、役員とかやってたら、結構強い。（略）私、結構な、なめられたらイヤやから、基本結構参加するようにはしてんのやんか。仕事終わって、連れていっても、「ああ、お母さん、すいません。若いのに」とか、普通に言ってくれるから。「あ、若いのに頑張ってるねんな」みたいな感じで言ってくれるから。極力参加はする。そういう、何ていうん、行事ごとみたいな。参加せえへんかったら「やっぱ、若いから」って言われるし。（略）

Nさん：役員，強いよな？

Lさん：そう，役員は強い。ほんで，役員真面目にしてたら，結構良く思ってくれる。

Kさん：しっかりしてる。

また，KさんはLさんのこれらの発言に対し，とても感心したとインタビュー後にスタッフに伝えていた。サポートグループは，このように，10代の母親としての身の処し方を学ぶ場にもなっていた。

(3) 【母親であることを重視した交友関係】

① 《友人の条件》

母親たちは，交友関係についてしっかりと自身の判断基準を持っており，「世間知らずな子」や「常識のない子」とは付き合えないと述べている。母親達は，夫と子どものいる家庭を重視しており，家庭のリズムを壊すような交友関係は求めない。そして，母親たちの中でも，同じような生活リズムを持つ母親と親しくなっている。

② 《ピアの役割》

〈しんどい時は友達に相談する〉

グループメンバーの多くが，グループ外でも交流を持ち，グループが終了した後も，ファストフード店や，カラオケボックス等に行き，母親同士で交流を深めている。Bさんは，グループ内でも仲の良いAさんに，何かあったらすぐ相談するという。

Bさん：へこんだら，とりあえず誰かに相談やる。へこんでな，Aにいきなりな，メールするもんな。「嫌やねん」言うてな。

Aさん：いきなりメール来たら，びっくりするで。

グループ内外でも友人の多いJさんは，相談する相手として，親と友人を使い分けていた。

Jさん：精神的しんどい時は友達。なんか，親には本音っていうか，なんて言うん，嫌なこととか言われへんくない？（略）自分が悩み抱えていることとかは，親には言いたくない。だから，そういうのは友達。だから，自分の中で使い分けてる。それは。

(4) 【将来の生活設計をたてる】

インタビューにおいて，ホームヘルパーの資格を取りたいという声が複数聞かれた。専門職であるが，比較的取得が容易なこと，身近にホームヘルパーの有資格者が多いことが，関心の高さにつながっていると考えられた。

〈ヘルパーへの関心の高さ〉

司会：今後こんな資格が欲しいとか。

Dさん：ああ，ヘルパー。

Bさん：ヘルパーなあ。国家になったからな。取るの大変やねんな，今年から。去年（2005年）までは，国家じゃないから楽やってん。で，安くできてんけど。今年からあかん。なんかむっちゃ難しくなったって。試験が。

Aさん：ヘルパー取んのやったら，介護福祉士まで取ったほうが絶対いいと思う。

Bさん：でも，ヘルパー持ったら，とりあえず働けるしな。で，採ってくれる。けど，持っている人が今多いから。

〈利用できる公的支援を調べて指定する〉

Aさんは行政サービスについて，自分で全て事前に調べてから窓口に行き，担当職員が紹介するものでなく，自ら調べたサービスを利用し

たいと申し出て、なるべくお金をかけず、サービスを利用できるよう交渉していた。

Aさん：免除系？ 免除系全部やってんで、結構全部調べて。結構やってる。そろそろ、下水やったかな？ 上水やったかな？ もう免除できるのやんか。それも出そうかなと思ってるし。医療費？ なんかの申請をしたら医療費が1カ月かな、丸々ただになるとか。結構そういうのもあるから。全部そんなを調べて、やっている。

司会：すごいですね。こういうのって自分で情報をしないと、わかんないのって結構ないですか？

Aさん：結構、これはほんまに思うけど。結構こういうなんて言うん、（市の担当窓口）とか行っても絶対教えてくれんからね。「こういうのがあねんけど」って言っても、それよりお金の掛かることを先に持ってくる。

(5) 【10代の母親である自己像を構築する】

10代で出産した母親は、母親として日々を送っていくことや、友人たちとのかかわりを通して、母親であることに自信を持ち、10代らしく母親となっていく過程にあると考えられた。

〈母として子どもを守るべき存在〉

Aさんは、出産し子どもを持つことで、これまでの自分の意識が変わり、自分の楽しみよりも、子どもを中心に考え、母親として子どもを守ろうという意識が芽生えていた。

Aさん：若いころは、自分がよかったらそれでいいとか、今が楽しければそれでいいとか、そんなん思ってむちゃとかしとったけど、母親にな

って、実際この子が産まれて、なんかやっぱり守らなきゃって意識が出てくるから。

〈子どもがいる毎日が楽しい〉

子どもが日々成長する過程を見るのが楽しい、と述べている母親もいた。

〈育児は自己流で行なう〉

母親たちは育児に困難を感じても、育児書には頼らず、自分の親に聞くことも少ない。まず友人たちに聞くか、自分自身で解決しようと努力している。こうした対応をとる理由は、親との関係が希薄であることも挙げられるが、若い母親同士の横のつながりが深く、気軽に相談できる友達が周囲にいることも挙げられる。

Aさん：とりあえず自己流やもん、みんな常に。

Bさん：本当に分かんなかったら、周りに聞くやろ。親に聞いても、親のころとやっぱり考え方は違うし。

Aさん：別に、だって、子ども一人一人バラバラやから、あんまり資料とか見たところで、それのおりにならへんかったら、逆に不安になったり、ムカついたりするから。とりあえず自分なりにやってみる。

Bさん：分からなかったら。

Aさん：とりあえずあきらめる。無理やったら。「もう、いいわ。また、どうにかなるやろ」って思うから。

〈自らの生活基盤を整えたことに自信を持つ〉

Aさんは、自分なりの生活基盤を持つことで、子育てに自信を持つことができ、10代で出産したことに対し、周囲の様々な反応に慣れてきたという。

Aさん：今、子どもが2人になって、まともに生活やってきてるって。別に誰かにお金借りてるわけでもないし、助けてもらってやってきてるわけでもない。そら、ちょちょ助けてもらったりしてる部分はあるけど、自分らで生活の基礎つくって、自分らなりの子育てしてやっていってんねんから、別に恥ずかしいことしてないっていう、自分らに自信でできたから。

〈自分らしい母親像を構築する〉

司会：じゃあ、こんなね、グループあったら友達とかは誘う？

Iさん：最初、妊娠分かったときって、「あ、しっかりせな」って思うやんか。「大人にならな」思って「お母さんになるんやし」と思って、めっちゃ勉強したら、なんか親とか話聞いたりとか、勉強したりとかしたら、「あ、こんなんではあかんのや」って、「自分の今までのんじゃあかんのや」と思って、改正しようかなって思っていたときにここ（サポートグループ）に来たから。「あ、こんなんでも大丈夫」やっていう余裕。「大丈夫や」って思ったんやんか。親を見るから。親みたいにならなあかんと思ってるから。でも、大丈夫やった。

Iさんの場合、自らの母親を理想像とし「しっかりした」母親になろうと話を聞き、勉強していた。しかし、グループにおいて、10代で出産した先輩である母親の接し方を見ることで、完璧に家事や育児をこなす母親の理想像を目指すのではなく、これまでの生活の延長として、失敗しながらも徐々に自分らしく母親になっていけばいいことを学んでいる。このように、グループは、他の母親から10代の母親のあるべき姿を教えられる場となっており、グループで他

の10代の母親を見ることで、自分なりの母親像を構築することが可能となっていた。

IV. 考察

1. 10代の母親という自己認識を形成していく上での他者との関わり

田間（2001）は、母性を内面化することにより、統制を主体的に受け入れやすいと述べているが、青年期である10代で母親となった彼女たちは、他者から承認されることにより母親としての自己を形成していく過程にある。そのため、母親としての自己認識を深め、母性役割を引き受け、他者から母親とみなされるように責任を持って行動することで、社会化が促進されている。

彼女たちは、母性という統制を受けて行動を変化させたのではなく、母親となることで社会化を試み、母親として社会化することに成功している。もし彼女たちが母親となることを選択しなければ、生活も交友関係もこれまで通りのものであつたらうし、自らの生活基盤を整える必要も、他者との関係調整に苦心する必要もなかっただろう。しかし、彼女たちは自らに母親役割を課すことで、これまでの生活を大きく変更することができていた。彼女たちは母性という統制を、能動的に自身の社会化のために利用していると考えられた。

また、10代の母親たちは自らに母親役割を課し、母親として他者と関わっていくことにより、母親として自己認識を深め、そのことで青年期の発達課題を達成することができていた。彼女たちは青年期でありながら、子どもを産み育てるといふ、生殖期の課題に直面するが、母親としての自己認識を深めることで、青年期の

課題も達成することができていた。母親としての統制は、10代の母親達の社会化を促すために必要なプロセスだったと言える。

こうした変化は、本人自身が意図し、能動的に行動するだけでなく、夫や子ども、義両親など他者からの影響も大きかった。周囲の母親に母親として受け入れられるため、生活を維持し子どもを守るため、夫と夫婦関係を構築するために、彼女たちは母親としての振る舞いを身につけ、実践し、母親として自己を確立しようとしていた。その戦略の一つが「保育所等の役員を引き受ける」ことであった。役員を引き受けることにより他の母親に承認され、いわゆる「10代の母親」ではなく、一人の母親として地域社会で居場所を作ることに成功していた。

こうした努力のもと、周囲の反応も「若いからできひんやろ」から「若いのに頑張ってるねんな」という評価に変わっていく。しかし、どちらにしても、一人の母親としてより、その若さに視点が注がれ続ける。

インタビュー結果から、他者に母親として認められることの困難さについて、多くのカテゴリーがみられた。10代で出産することの問題点として、「母親としての自覚に欠けている」ことを指摘する論文は多数見られる（片桐，2001 前川，2001）。しかし実際は、10代の母親は母親になることに大きなプレッシャーを感じながら育児を行っていた。さらに、父親になりきれない夫や、10代での出産を受け入れられない義両親との摩擦、周囲との摩擦を抱えながらも、母親達はそれぞれの対象に応じ戦略を使い分け、常識や社会性を重んじ、自分なりの育児のスタイルやファッションを貫こうとしていた。

また10代の母親は、母親としての役割期待

と、10代としての役割期待の中で混乱しており、地域社会からの態度の変更の要望にこたえられず、母親としての自己認識を形成していくことに困難を生じていた。エリクソンは、自己確信は、発達それ自身に内在する不連続性のえじきになるという。そして、それを解決するためには決定的にしかも戦略的な行為のパターンを再編成しなければならないと述べている。10代の母親達も、「10代」になされる要求と「母親」になされる要求の不連続性に対応し、戦略的に自分の行動を再編成し、母親として自己認識を深めることができていた。

このことから、10代の母親達は、母親として、周囲の人々との関係性の中で、自分自身を理解してもらうように努力し、生活基盤を整え、自らの行動を母親としてあるべき姿に変容させ、社会化していく行動力を持っていることがわかった。

2. ピアグループの役割

母親と言う自己認識を形成していくうえで、ピアの影響は特に大きかった。10代の母親達はピアグループに自主的に参加し、悩みを相談し合ったり、母親としてどうあるべきかを学んだり、母親としての自己認識を深めるなど、多くのことを学んでいた。10代で出産する母親は全出産数の1.42%とごく少数であり、母親同士が集まった際に、同年代の友人を作ることは非常に困難である。そのため保育所等地域社会においては、彼女らは自らの場所を得るのに努力を必要とするが、グループはありのままの10代の姿を見られる／見せられる場となっていた。

Coletta (1983) は、10代で出産した母親に対し調査を行なった結果、地域の社会支援を受けている人は、抑うつ症状が低い人が多かったと

述べている。こうした支援とつながることで、育児不安を解消することも可能となっていることがうかがえる。

このグループは現在こそ毎月10人前後の人数が集まり、10代の母親同士やボランティアなど地域の住民との交流の場となっているが、始めからグループ活動が軌道に乗ったわけではない。松山（2004）は「母親たちとコミュニケーションを図ることが難しく、彼女らが求めていることを把握し、支援できているとは言い難かった」と述べている。援助者自身どう支援してよいかわからなかった時に、グループで支援することを考えたことが、成功に繋がっていると考えられる。グループにおける支援者の関わりとして、野口（2005）は、専門家はクライアントの生きる世界について「無知」であり、クライアントこそが専門家である。その世界をクライアントに教えてもらうという姿勢が、「無知の姿勢」であると述べている。この場合も、専門家が一方的に指導するのではなく、親同士の仲間作りを進めていったことで、彼らが安心できる場を作り出すことができていると考えられた。

3. 10代の母親の社会的背景と固有のニーズ

インタビュー結果から、10代で出産した母親の社会的背景として、学校生活に順応しないこと、学生時代からアルバイトをして労働市場に参入し、家計を助けたり学費を賄うなど、家族の庇護に頼らず（頼れず）自立した生活を送っていたこと、さらに出産、子育てを支える家族の存在があったことが示された。海外の先行研究と比較すると、インタビューが同一地域で行なわれたため、地域ごとの差異は明らかにならなかったが、【学校生活に順応しない】ことに

より、教育到達度が低いと考えられること、さらに【金銭面での自立】を求められる環境から、原家族の就業状態が不安定であることが示唆された。

10代の母親の固有のニーズとして、同世代の友人の存在、原家族を頼れない場合の育児の支援、夫・義父母・年代の違う母親・周囲の人々に母親として認められること、公的サービスや就労に結び付きやすい資格についての情報が挙げられた。

10代の母親が、母親として生活していく上で、ピアの果たす役割は小さくなかった。育児支援や同年代の友人との交流は、一部の病院や地域で限定的に行なわれているのみだが、同年代の母親同士が交流できる場や10代という世代の特性を生かした育児支援が望まれる。

公的サービスや就労に向けての情報について、わが国においては市町村の担当課窓口やマザーズハローワーク等で行なわれているが、10代の母親に特化したものではない。彼女たち自身は、専門職であり求人数も多いホームヘルパーへの関心は高いが、教育到達度が低く、就労経験が乏しく、さらに子どもを抱える母親といった、社会的に不利な条件を抱える10代の母親達にとって、職業的社会的には非常に困難である。こうした10代の母親達に対して、イギリスでは、Care to Learn プログラムとして、20歳以下の男女が、教育や職業訓練を受けている間の保育料を支払う制度や、16歳以下で妊娠した母親が義務教育を修了するために様々なコースを準備している（DH, DCSf, 2007）。また、親としてのスキル、育児、教育、住居について相談するアドバイザーも存在するなど、社会的に不利な状況を改善するための具体的な支援が行われている。（SEU, 1999）。わが国においても、

現状の子育て支援だけでなく、就業支援や福祉施策の情報提供等が必要であると考えられた。就労につながる具体的な支援が行なわれることで、このような、社会的に不利な状況が解消される一助となると考えられる。

4. 10代の出産をもたらす社会的諸条件

10代で出産した母親は、子どもを出産したことにより、新たな家族を形成していく。しかし、原家族での母親役割をそのまま受け継いでいく家庭もある。10代の母親の家庭では、伝統的な性別役割分業がなされており、父親は母親ほど積極的に育児に関わろうとはしない。中野(2004)は、「母性理念判定尺度」を用いて年別に調査を行ったところ、伝統的な母親役割を肯定する項目が、若年層ほど高得点であったと述べている。また柏木(1999)は、母親を「大卒無職群」と「高卒無職群」にわけて比較したところ、高卒の母親は、時間やエネルギーを自分のために使うことだけでなく、家族のために使うことも生き方への満足感を高め、また家族のために時間やエネルギーを使う人ほど、周囲の人との絆を強く感じていると述べている。10代の母親の学歴の多くが、高校中退あるいは卒業であることから、ここでいう「高卒無職群」に近いことを考えると、10代の母親は、伝統的な母親役割を肯定し、家族のために時間やエネルギーを使うことに満足し、周囲の絆を感じていると言える。インタビューを行なった母親も、出生地と現在の居住地が近く、地域の同年代の母親についてもよく把握しており、地域でのネットワークを形成しやすい状況にあった。

だが、こうした背景にはわが国の10代の母親に対する社会サービスの貧弱さがある。出産した母親に対して、復学や就労支援などの社会的

サービスが乏しいために、彼女たちは、家族のために自らの時間やエネルギーを使い、周囲の人と親密性を構築せざるを得ない状況にあることも示唆された。

さらに、このような考え方や行動は、10代で出産した母親たちが生きてきたこれまでの生育歴も大きく影響している。10代で出産した母親においては、その母親の子どもが10代で子どもを産むという、世代間連鎖が問題とされているが、成長過程において大きな影響をもたらした原家族の影響を受けるのは当然のことであり、子が親の姿を肯定しているからこそ、自らの母親を母親像の基盤とし、同一化しようとしていると考えられる。10代で出産する背景には、独特の環境や文化がみられる。10代での出産も、彼女たちにとっては、母親も同じ年代で出産を経験し、出産してから結婚する人も周囲に存在するなど、決して特別なことではなく、自然なこととされていた。

おわりに

本稿では、10代の母親自身の語りを中心に、不可視化されていた10代の母親が、母性という制度を利用して能動的に社会化し、母親としての自己認識を深めていく過程と、それに伴う困難について明らかにした。わが国においても、10代の母親の社会的な不利に注目し、支援を私的領域のみに委ねるのではなく、公的な支援を検討していくことが必要である。また10代の母親達の固有のニーズとして、就業支援や、福祉施策の情報提供、ピアグループによる支援が挙げられた。10代の母親達だけに社会化に向けての大きな負担を強いるのではなく、彼女ら一人一人の現状に合わせて、適切な支援を検討し提

供していく必要があると考えられた。

今後は、10代の母親を支えるコミュニティやインフォーマルサポートが、10代の母親をどのような存在として認識し、どのような支援が必要であるかとらえているのかを明らかにし、コミュニティにおける支援の方向性について検討したい。

注

- 1) 貧困地域 (Deprived Area) とは、収入、雇用、健康状態、教育・トレーニング、住居と土地、生活環境、犯罪の面で恵まれない地域のことを指す (Offices for Deputy Prime minister, 2004)。
- 2) 国民の健康づくり運動 (健康日本21) の一環として「健やか親子21」が2001年～2014年にかけて、各都道府県・市町村において実施されている。都道府県の計画策定率は83%である。この計画に基づき思春期保健対策に取り組んでいる地方公共団体は都道府県が100%、政令市90.9%、市町村38.8%と主に都道府県や政令市を中心に進められている。
- 3) 教育入院とは、疾患についての基礎知識を学び、治療法を理解するために入院すること。特に、糖尿病などの生活習慣病を持つ患者に行われることが多い。

文献

安達久美子, 2006, 統計からみた10代の女性の出産, 『思春期学』, 24 (2), pp407-414.

Centre for Longitudinal Studies, 2005, CLS Cohort Studies Data Note4.

Colletta N, C., 1983, At Risk for Depression: A Study of Young Mothers, The Journal of Genetic Psychology, 142, pp301-310.

Department for Education and Skills, 2006, Teenage Pregnancy Next Steps: Guidance for Local Authorities and Primary Care Trusts in Effective Delivery of Local Strategies, DfEs Publications, Nottingham.

Department of Health, Department for children, schools and families, 2007, Teenage Parents Next Steps: Guidance for Local Authorities and Primary Care Trusts, DCSF Publications, Nottingham.

E. H. エリクソン, 『アイデンティティ 改訂—青年と危機』金沢文庫, 1982.

E. H. エリクソン, 『ライフサイクル, その完結』, みすず書房, 1989.

片桐清一, 2001, 「若年妊娠の社会的背景とその支援」, 『周産期医学』, 31 (6), pp745-748

柏木恵子他, 1999, 「女性における子どもの価値—今, なぜ子を産むか—」, 『教育心理学研究』47 (2), pp50-59.

加藤曜子, 2006, 「どう支える? 親になりきれない親—第46回日本母性衛生学会学術集会」, 『母性衛生』, 46 (4), pp484-486.

栗岡幹英, 2001, 「被害被害者手記に見るクレームの構成」, (中河伸俊他編, 社会構築主義のスペクトラム, パースペクティブの現在と可能性, ナカニシヤ出版).

野口裕二, 2005, 『ナラティブの臨床社会学』, 勁草書房.

前川喜平, 2001, 「養育機能不全 (親準備性の不足) と子育て支援」, 『周産期医学』, 31 (6), pp817-825.

松山美紀, 2004, 「10代の母親へのグループ支援の現状と課題」, 『平成16年度厚生労働省研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業) 分担研究 出産を可能にする環境整備に関する研究』, pp16-21.

森田明美, 2004, 10代で出産した母親たちの子育て—実態調査から学ぶこと—, 『月刊福祉』, 4, pp42-45.

中野英之他, 2004, 「当院における産褥女性の精神的年代間較差に関する検討」, 『女性心身医学』, pp219-227.

西村美智代他, 2006, 「10代で出産を選択した妊婦の生活—生涯発達と妊婦の発達過程における—考察」, 『滋賀母性衛生学会誌』, 6, pp13-20.

Offices for Deputy Prime minister, 2004, The English indices of deprivation index, ODPM

- publications, London.
- 大川聡子, 2007, 「10代で出産した母親に対するグループアプローチの効果—自分らしく「親」になること」, 『第66回日本公衆衛生学会, 総会抄録集』.
- 大川聡子, 2008, 「10代で出産した女性の生活実態の把握とサポートの整備に関する研究」, 『第38回三菱財団事業報告書』, pp568-569.
- リウ真田知子, 1998, 「若年出産者への保健指導」, 『ベリネイタルケア 新春増刊』, pp197-208.
- 貞永明美, 2006, 「大分県の現状と取り組み」, 『産婦人科の世界』, 58 (1), pp13-25.
- 齋藤幸子他, 2004, 「少子社会における次世代育成能力に関する調査」, 『保健医療科学』, 53 (3), pp218-227.
- 佐藤拓代, 2010, 現代の子産み・子育てと親支援, 『家族と健康』, pp4-5.
- 健やか親子21検討会, 健やか親子21検討会報告書—母子保健の2010年までの国民運動計画, http://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1_c_18.html
- 高橋健太郎他, 1987, 出雲地区における十代妊娠例の検討—アンケート調査の結果から—, 『思春期学』, 5 (3), pp409-415.
- 田間泰子, 2001, 『母性愛という制度』, 勁草書房
- 渡邊智子, 2007, 教育入院～若年妊娠・出産を支えるために, 『家族と健康』, p2.

Clarification of support needs in the process of socialization of teenage mothers

OKAWA Satoko *

Abstract: Although public support based on social background has been given to teenage mothers in America and England, public support has been scant in Japan as more emphasis has been put on “prevention” of teenage pregnancy, and teenage mothers have been ignored. Focusing on teenage mothers who are forming their personal identities, which is a developmental problem of adolescence, as mothers, this study was carried out to analyze the process and the context by which teenage mothers are transforming their own behavior and deepening their self-recognition as mothers, based on interview research conducted among peer groups. As a result of the interviews, it has been recognized that teenage mothers are actively utilizing self-control as mothers for their self-socialization as they considerably change their lifestyles by putting themselves in the role of mother. Although teenage mothers are in their adolescent period, they address developmental problems of the adolescent and reproductive period by deepening their self-awareness as a mother. Also, these mothers are able to learn how to conduct themselves as teenage mothers, making friends with whom they can talk about their worries, by joining peer groups. It was recognized that not only current child-support programs but also employment supports, welfare information services and peer group supports are necessary in order for teenage mothers to become socialized.

Keywords: Teenage pregnancy/delivery, Peer, Identity formation, Interview research

* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University